

日中両国における人文学の概念形成 ——「整理国故」と「封建」を中心に

武 藤 秀 太 郎

The Concept Formation of “Humanities” in Japan and China

Shutaro MUTO

Abstract

The purpose of this paper is to examine the concept formation of “humanities” in Japan and China with special reference to two scholars: the Japanese scholar Kuwahara Jitsuzô (1871-1931) and Chinese scholar Hu Shih (1891-1962).

Kuwahara Jitsuzô was born in Fukui, Japan. After graduating from the Third High School (*Sankô*) in 1893, he studied Sinology at the Faculty of Literature, Tokyo Imperial University, graduating in 1896. Jitsuzô continued his education in graduate school where he studied orient history (*Tôyôshi*). He is known as a pioneer of *Tôyôshi*, which occupied an important place in the study of humanities in prewar Japan. Jitsuzô published “*Chûtô Tôyôshi* (Oriental history for secondary school)” in 1898, and it became one of the most popular and standard textbooks in China as well as Japan. Later, his son Kuwahara Takeo was also a famous scholar of French literature and culture.

Hu Shih was born in Anhui, China. He went to the United States in 1910 as a scholar on the Boxer Indemnity Scholarship Program. Shih studied philosophy under the guidance of John Dewey at Columbia University, and in 1917 became a professor at Peking University where he took the lead in China’s new culture movement. His essay “*Wenxue gailiang chuyi* (Some proposals for the reform in literature, 1917)” triggered the spread of new literature in Chinese vernacular. “*Zhongguo zhexueshi dagang* (Outline of the history of Chinese philosophy, 1919),” based on Shih’s Ph.D. dissertation, analyzed the history of Chinese ancient philosophy in a positive and scientific approach, creating a great sensation in the Chinese academia.

Jitsuzô and Shih thusly made remarkable achievements in humanities of Japan and China. It is interesting to note that Shih’s views on oriental history were strongly influenced by Jitsuzô’s theory. This paper clarifies the relationships between Kuwahara Jitsuzô and Hu Shih, shedding new light on Japanese and Chinese humanities in the first half of the 20th century.

はじめに

本シンポジウムの正タイトル、副タイトルにそれぞれみえる「人文学」という語は今日、英語である“Humanities”の定訳として、日中韓、さらにはベトナムを含めた漢字文化圏で通用している。こうした西洋に由来する学問分野の訳語である漢字語には、大きく2つのタイプがある。1つは、哲学 (Philosophy) や体育 (Physical education) のよう

に、翻訳を通じ、新たに創造された語である。もう1つは、もともと存在した熟語を借用する形で生まれた語である。政治、法律、経済、倫理、物理などがこれにあたる。人文学の「人文」も、『易経』に「觀乎天文、以察時變、觀乎人文、以化成天下 (天文を觀て、以て時變を察し、人文を觀て、以て天下を化成す)」とあるように、古代より存在した語であった。

この儒教の経典にみえる「人文」とは、もともと礼教、礼樂を意味していたと考えられる。これはも

ちろん、“Humanities”の原義と完全に一致しない。「人文」学は、本来の意味内容を残しつつ、“Humanities”という概念の受容により新たな性質を獲得し、再編成されていったのである。「ヨーロッパの学知と東アジアの人文学」を考える際にも、この連続性と断絶面をはっきりとふまえる必要がある。

人文学の一分野である「歴史学」の「歴史」もまた、古くは『三国志』にみられる言葉である。ここでは、人間にまつわる過去の出来事といった意味で用いられ、“History”の原義ともほぼ合致しているように見える。だが、訳語として「歴史」が“History”へと架橋された際、その内包と外延は大きな変容を余儀なくされた。その具体的な態様は、帝国大学における「史学」の設立過程にみとめることができる。

帝大文科大学に「史学科」が設置されたのは、1887年9月のことであった。その翌年10月には、内閣臨時修史局の事業が帝国大学へと移管され、臨時編年史編纂掛が設けられた。ここで目論まれた「史」とは、明治新政府の正統性を明示しようとする官選の歴史で、いわば中国の正史にならったものであった。重野安繹、久米邦武、星野恒といった臨時修史局の漢学者らも、移管にともない、文科大学教授へと転じ、1889年6月に「国史科」が新設された。こうした帝国大学における「史学」の成り立ちは、「歴史」の連続性を表すものといえる。

「史学科」と別に、「国史科」が置かれた理由としては、「史学科」のカリキュラムが西洋史中心であったこともあげられる。実際、草創期の「史学科」で、「世界史」や「史学研究法」を講じたのが、L.ランケの弟子であったドイツ人教師L.リースであった。リースは、「国史科」の運営にも助力し、「史学会」の創設を後押しした。この史学会の初代会長となったのが、重野である。重野は史学会創立大会で、「史学に従事する者は其心至公至平ならざるべからず」と題した講演をおこなった。その内容は題名の通り、歴史研究における「至公至平」の重要性を説いたものであり、そこには“History”、すなわちヨーロッパの実証史学からの影響をみてとることができる。

以上のように「史学科」と「国史科」の二本立てではじめられた帝国大学の「史学」研究にあって、中国史は「漢学科」で教えられていた。その後、中

国もその一部とする「東洋史学科」ができたのが、世紀をまたいだ1910年のことである。そもそも日本の知識人が学ぶべき「歴史」とは、日本史よりも中国の正史であった。他方、「東洋史」という名称に、中国、および「西洋史」であった“History”を相対化させる意図があったことは明らかであろう。その意味で、日本で生まれた「東洋史」は、「歴史」と“History”が交錯した縮図を表しているといえる。

この「東洋史」という名称の普及に、誰よりも貢献があったといえるのが、桑原隲蔵であった。興味深いことに、桑原が提唱した「科学的」歴史研究は、中国で新文化運動を主導した胡適にも、少なからぬ影響をおよぼしている。本報告では、「ヨーロッパの学知と東アジアの人文学」をさぐる1つの試みとして、まずこの両者の関係をみてゆくことにしたい。

桑原隲蔵 (1871-1931)

福井県敦賀で和紙製造業を営んだ家に生まれる。幼少より勉学に優れ、京都府立中学校、第三高等中学校を経て、1893年7月に帝大文科大学漢学科へ入学した。中学時代より歴史学をこころざし、「世界的歴史家 桑原隲蔵」などとノートに書きとめていたという。漢学科を卒業した桑原は、大学院へと進学し、東洋史を専攻した。

桑原が指導をうけた教師に、坪井九馬三と那珂通世がいる。坪井の教授内容をうかがう手がかりとしては、早稲田大学でおこなった講義をもとめた『史学研究法』(1903)がある。「科学的研究法を史学に応用し聊か得たるところある」と序で記された『史学研究法』は、基本的にE.ベルンハイムの『史学入門 (*Einleitung in die Geschichtswissenschaft*)』に即したものであった。息子の武夫によれば、桑原はランケを歴史家として尊敬し、晩年まで書齋にランケの肖像をかけていたという。桑原の学術論文には、注の分量が多いという特徴がある。これも、ドイツの実証史学のスタイルにならったものといえる。

1894年、中等教育に「東洋史」の科目が加えられた背景には、那珂の働きかけがあったとされている。桑原著、那珂校閲『中等東洋史』が公刊されたのは、1898年のことであった。翌年には、中国語訳が上海の東文学社から出版されている。以後、桑原が執筆した東洋史の教科書は、長年にわたり全国の学校で広く用いられた。

母校の三高、そして東京高等師範学校の教授をつ

とめた桑原は、1907年4月より2年間、文部省の命を受け中国へ留学した。帰国後は、内藤湖南とともに、京都帝国大学文科大学史学科の東洋史講座の初代教授をつとめた。ジャーナリズム出身で、清朝考証学を評価し、「支那学」をうたった内藤に対し、桑原が「科学的」な見地から、清朝考証学に批判的態度をとり、「東洋史」の名称にこだわるなど、両者の学風は多くの点で対照的であった。

【資料1】羽田享による桑原隲蔵『東洋文明史論叢』の序、1934年

「我が国に於て、學術に関する論文中にこの脚注を多く用ゐることは、本來歐洲学界に於ける体裁を受け入れたのであることは言ふまでもないが、内外博覧の博士は、歐洲の東洋学者中でも特に独逸の学者の間に多く認められる此の種の整つた論述の形式を賞讃せられ、論文の形はかく有りたいなどと語られたことから考へても、この方面から受けられた影響も少なくなつたと思はれる。」

【資料2】宮崎市定による桑原隲蔵評

「博士はよく「歴史の研究とは、事実をきめていくことだ」といわれた。歴史学の上では、一步一步、動かない事実を確かめた上でなければ、研究成果を積み上げていくことができない。いわんや誤った認識の上に立って、どんな議論をしても役にたたない。だから博士はしばしば中国の在来の学風の不正確さを批判して、「中国人の学者は頭が悪い」とまで言われた。…博士はまた「自分のやっていることは東洋史であつて、シナ学とは違うものだ」と明言しておられた。そこで昭和五年、博士が還暦を迎えられた時、知友門人が集まって各一篇を草して献呈した書名は、京都における伝統的な呼称にかかわらず『東洋史論叢』と題した。」（「桑原隲蔵博士について」桑原隲蔵『中国の考道』はしがき）「一見して無思想性と思われる自然科学も、実は偉大な科学者の思想によって指導され、その方向が決定され、その線上に沿って今回の如き隆盛を見るに至つたのである。桑原先生の歴史学も恐らく、このような信念の下に研究が進められたに違いない。そして当時における歴史学の共通な約束とは、坪井久馬三博士によって

講ぜられた、ベルンハイム流のドイツ史学に外ならなかつたと思われる。」（「桑原史学の立場」『桑原隲蔵全集』月報6）

桑田は1917年3月、『太陽』に「支那学研究者の任務」と題した文章を發表した。中国語文献の読解能力はたいしたことない欧米の研究者たちが、注目すべき研究成果をうみだしているのはなぜか。その理由として、桑原は彼らが「科学的方法」にもとづき、分析していることをあげた。たとえば、漢代の「一里」がどのくらいに相当するかは、史料の記述と確定的な地点間における実際の距離をてらしあわせることで、約400メートルと推定が可能である。ただ、これら史料を活用するためには、まず史料批判をおこない、統一した分類、順序でまとめるなど、「整理」をおこなう必要がある。この桑原の文章は、ほどなくして中国の『新青年』第3巻第3号（1917.5）へと訳載された。

【資料3】桑原隲蔵「支那学研究者の任務」『太陽』1917年3月

「支那の書籍は、大体から見渡して、未整理の状態にある。之を利用する前に、先づ科学的方法で十分に整理を加へ、かく整理した材料を、科学的方法によつて、研究せなければならぬと思ふ。

若し吾が輩の見る所に大なる誤がないならば、我国に於ける支那学研究には、この科学的方法が、まだ十分に利用されて居らぬ様である。甚しきはこの科学的方法を無視して居る様に、疑はれる点もある。科学的方法は西洋の学問のみに応用すべきものでない。日本や支那の学問研究も亦、勿論この方法に拠らねばならぬ。」

「吾が輩の見る所に拠ると、我が国の支那史学者が、世界の学界に貢献すべき事業として、尤も適當なるものは、支那歴代の正史の整理に在ると思ふ。」

この桑原の論文を読み、大きな感化をうけたのが、胡適であつた。胡適の日記には、桑原論文について、「その大旨は、中国学を治めるのに、科学的方法を採用すべきというもので、至極まっとうな意見である」とし、「一里」を400メートルとした推定が、「歴史学の一大発見」と評価されていた。ま

た、中国の書籍が「整理」されておらず、利用に適さないとの意見にふれ、「『整理』とは、すなわち英語の Systematize である」と記していた。この記述から、胡適にとって日本語の「整理」が、耳慣れない言葉であったことがよみとれる。

胡適 (1891-1962)

現在の上海市浦東新区で生まれる。台湾で働いた父が日清戦争直後に亡くなり、母の女手ひとつで育てられた。上海の梅溪学堂や中国公学で学んだ後、義和団事件賠償金（庚子賠款）を基金としたアメリカ官費留学生として1910年、アメリカに渡った。当初、農学を専攻したものの、まもなく哲学に変更し、コロンビア大学でJ. デューイに師事した。

1917年に帰国した胡適は、北京大学教授となり、陳独秀や魯迅らとともに、中国の新文化運動を担った。彼が『新青年』へ寄稿した「文学改良芻議」（1917.1）は、官話（文語）でなく、白話（口語）文を用いた新しい文学の誕生をうながした記念碑的作品である。また、『中国哲学史大綱』上巻（1919）は、三皇五帝の信ぴょう性や孔子と老子の事実関係を問うなど、実証主義の立場から古代中国思想を分析的、系統的に論じ、旧来のパラダイムを一変させる影響をもたらした。胡適は、儒学や古典文学、禅宗など、さまざまな史料の発掘、整理にもとりくんだ。彼が英仏で発見した敦煌の写本をもとに、編纂した『神会和尚遺集』（1930）は、鈴木大拙からも「極めて精緻な批評眼で材料を整理」したものと評価されている。

駐米大使（1938-42）や北京大学校長（1946-8）、台湾中央研究院院長（1957-62）など、数々の要職も歴任した。1939年には、ノーベル文学賞候補にもノミネートされている。

胡適は1919年12月、「新思潮的意義」と題した論文を『新青年』に発表した。中国における「新思潮」の根本的意義とは、「批判的態度」にほかならない。胡適は、この「批判的態度」を、F. ニーチェのいう「あらゆる価値の価値転換（transvaluation of all values）」にあたるものとし、中国旧来の学術思想に対しても、同様に「批判的態度」でのごむべきことを主張した。彼によれば、旧来の学術思想に対する態度は、(1) 盲従に反対する、(2) 調和に反対する、(3) 「整理国故」を主張する、の3種類に分けられるという。ここでいう「整理国故」とは、

桑原が説いたように、古代の学術思想を、条理をたて系統的に「整理」し、「科学的方法」で精確な考証をおこなうことを指していた。「整理」という概念を用いていることから、桑原の文章から大きな示唆をうけたと解釈できる。この胡適が提唱した「整理国故」は、中国の「人文学」がとりくむべき課題を端的に表したキーワードとして、人口に膾炙してゆくこととなる。

北京大学における「史学」の形成

科挙廃止にさきだつ1904年1月、日本の学制をモデルとし、新しい教育制度をさだめた「奏定学堂章程（癸卯学制）」が公布された。その「学務要綱」では、日本にならい「洋文」を習得する必要が唱えられ、「中国堂以上の各学堂は、必ず洋文の学習にいそしみ、大学堂の経学、理学、中国文学、史学の各科は、とりわけ洋文に精通しなければならない」と説かれていた。この方針のもとに、全国各地に初等、中等、高等の各教育機関が設置されたのである。

北京大学の前身にあたる京師大学堂では結局、「奏定学堂章程」で構想された「文科史学門」は開設されなかった。ただ、その「師範科」に「中外史学課程」があり、外国人教師として坂本健一や服部宇之吉らが教授していた。辛亥革命を経て、北京大学となった後も、すぐに「史学門」は設けられず、「予科」や「文学門」の「言語学類」で「史学課程」が講じられていた。

1917年、日本への留学経験のある蔡元培が北京大学校長に就任すると、学制改革に着手し、「文科」に「史学門」を増設した。胡適をアメリカから呼びよせたのも、蔡である。「改定課程一覧」をみると、「史学門」は、「通科」と「専科」に分かれ、「通科」に「中国通史」、「東洋通史」、「西洋通史」、「歴史学原理」、「人種学及人類学」、「社会学」、「外国語」の講座が設置された。この歴史を自国史、東洋史、西洋史と区分するやり方は、いうまでもなく日本の大学を範としたものであった。当時用いられた歴史教科書の多くは、桑原の『中等東洋史』が示した時代区分に依拠して論述されていた。これに対し、桑原の時代区分は、あくまで「極東人」の視点からながめたもので、中国の実情に合っていないといった意見も存在した。たしかに、桑原は中央アジアをめぐる諸民族の興亡として、「東洋史」を描いており、「漢族」、「チベット族」、「交趾支那族」を「支那人種」

とし、「日本族」、「ツングース族」、「蒙古族」、「トルコ族」からなる「西伯利人種」と対置させていた。すなわち、「支那人種」と「西伯利人種」における角逐の軌跡として、東洋史を描いたのである。

【資料4】那珂通世による桑原隲藏『中等東洋史』の叙

「近年東洋史の書、世に行はるる者頗る多けれども、皆支那の盛衰のみを詳にして塞外の事変を略し、殊に東西両洋の連鎖なる、中央アジアの興亡の如きは、全く省略に従ふが故に、アジア古今の大勢を考ふるに於ては、不十分なることを免れず。予常に之を憾とせり。此頃文学士桑原隲藏君中等東洋史を著はして予に示せり。予受けて之を読むに、世に出づるを喜び、一言を題して之が序となす。」

ところで、胡適が提唱した「整理国故」の成り立ちを考える上で、彼に重要な示唆を与えたと考えられるもう1人の日本人が、朝河貫一(1873-1948)であった。胡適と朝河は1917年6月、偶然にも太平洋を航海する汽船に乗りあわせた。朝河が、のちの『入来文書』につながる研究調査での日本留学であったのに対し、胡適は、北京大学に赴任するための帰国であった。朝河は1等室、胡適は5人が同居する2等室と、部屋が異なったものの、2人は航行中、船の最上階にあった喫煙室で、毎日のように顔をあわせ、語りあったという。朝河は航行中、英語の自著“*The Origin of the Feudal Land Tenure in Japan*”を胡適に贈った。この論文では、西欧と日本における封建制度(feudalism)の歴史的類似性を指摘した上で、日本における封建的土地所有の生成過程が考察されていた。胡適は、この朝河の論文をよみ、その感想を日記に書き留めていた。

【資料5】胡適の留学日記

「さきに読んだ朝河貫一先生の「日本封建時代における田畑所有の起源」には、多くの面白い事実があった。ここに摘記する。

附注「封建制度」は、西洋語である“Feudalism”の訳名で、実際のところあまり的確とはいえない。この制度と我が国歴史上のいわゆる「封建」には、違いがある。今は適当な名称がないため、とりあえずこれを用いる。私は朝河

君に、日本の学者がかつていかなる名称を用いていたかをたずねた。朝河君は、「封建制度」のほかに、「知行制度」が用いられたといった。「知行」は、公文書にみえる文字である。当時小作人が身売りし、文書で契をむすんだ中にこのような文字があるが、実際に確たる名詞にならなかったとのことだ。今日、私はにわかに、「分契制度」、「割契制度」のほうが、「封建制度」よりもよいように思っていた。」

「封建制度」に関する言及は、それ以前の胡適にはみられず、朝河によってその関心をいただくようになったことが、日記からよみとれる。

1920年2月、胡適が雑誌『建設』を創刊した廖仲愷に宛てた手紙が、同誌に掲載された。その内容は、古代中国に存在したとされる井田制度の信ぴょう性を問うたものであった。胡適は、朝河の研究をひきあいにしつつ、古代井田制度の存在をみとめた胡漢民の論文に疑問を呈した。これを機に井田制度の存否をめぐる論争がくりひろげられることとなる。

【資料6】胡適「井田辯」『建設』1920年2月

「古代の封建制度は、決して『孟子』、『周官』、『王制』が説くような簡単なものでない。古代において部落から無数の小国が生じ、その域内域上にさらに無数の半開化民族が存在した。王室は、各国のうちの最強の国家にすぎず、名義上、宗教上、政治上の領袖をつとめた。いずれにせよ、その数千年もの間、「豆腐乾」のような封建制度が存在したことはありえない。中国の封建時代を研究したいのであれば、ヨーロッパ中世のfeudalismと日本近世の封建制度を参考にし、「豆腐乾を切った」ような封建制度を打破し、別に科学的態度をもって、歴史的想像力をくわえ、古代のいわゆる封建制度は一体いかなるものであったのかを、改めて発見しなければならない(朝河貫一のような日本の学者は、日本の封建制度に対し、きわめて科学的な研究をしている)。」

長方形の「豆腐乾」のように区画された封建制度が存在した証拠はなく、当時の政治状況に照らしても実行不可能で、孟子らが描いた井田制度は、ユー

トピアと考えるべきである。また、「封建制度」は、誤解を招きやすい表現であるゆえ、「割拠制度」の名称を用いたほうがよい。こうした手紙に示された胡適の見解は、まさに朝河論文をめぐる日記の断想を具体化したものといえる。

1923年1月、北京大学研究所国学門が、機関雑誌『国学季刊』を創刊した。その編集委員会主任であった胡適は、『国学季刊』創刊号冒頭に、「国学」がどうあるべきかを論じた『『国学季刊』発刊宣言』を公表した。胡適によれば、「国学」とは「国故学」の略語にすぎず、「国故」は「中国におけるあらゆる過去の文化、歴史」とされる。この「国学」に今後、とりくむ際の注意点として、胡適は(1)歴史的なまなざしをもって、国学研究の範囲を拡大すること、(2)系統的な整理により、国学研究の資料を区分すること、(3)比較研究により、国学の材料の整理と解釈をおぎなうこと、の3点をあげていた。(3)の内容について、胡適は「封建制度のように、これまであの四角形の分封説にあざむかれ、あれこれ論じてまったく分からなくなってしまった。今、われわれはヨーロッパ中世の封建制度、および日本の封建制度と比較すれば、容易に理解できる」と、ここでも「封建制度」を例に、「整理国故」における比較研究の有効性を説いたのである。なお、桑原はこの「発刊宣言」をよみ、中国人の中にも、「科学的方法」の必要性を自覚している者がいると評価していた。

実証史学における正と負

このように、中国における「史学」、とくに「東洋史」の成立を考える上で、日本との関わりは無視することができない。なかでも、桑原隲蔵は、日本で標準的教科書となった『中等東洋史』が中国でも広く受けいられるとともに、「整理国故」運動を展開した胡適に大きな影響をおよぼした。この桑原が強調した「科学的」歴史研究は、「自らを消し、史料のみに語らせること」を信条としたランケなど、ドイツの実証史学から学んだものであったといえる。

実際、桑原自身の歴史研究も、東西のさまざまな史料を渉猟し、テキスト・クリティークをおこない、「事実」を確定してゆくというスタイルをとっていた。ただ、その反面、論文の問題意識や主張は、総じてよみとりにくい。そのうちの1つに、中国人に

まつわる「食人」研究がある。桑原は、数多くの史料をあげ、中国で「食人」の風俗が古来よりおこなわれていたことを主張する一方、日本にそうした史料がほとんどないことから、日中国民性の違いとして結論づけていた。当時、大森貝塚などの発掘から、日本でもカニバリズムの存在が指摘されていたが、桑原からすると、それは推測をはさんだ確たる「史料」ではなかったのかもしれない。日本でも、極限的、ないしは特異な状況のもとで、「食人」行為がありえたのではないかと思いをめぐらすことは、「科学的」歴史研究から逸脱するものだったのであろう。

【資料7】桑原隲蔵「支那人間に於ける食人肉の風習」『東洋学報』1924年3月

「兎に角日本人が飢饉の場合、籠城の場合に、人肉を食用したといふ確証が見当らぬ。まして嗜好の為、憎悪の為、人を啖つた事実の見当らぬのは申す迄もない。…此の如く食人肉の風習は随分広く世界に行はれて居つたが、支那の如き世界最古の文明国の一で、然も幾千年間引続いて、この蛮風を持続した国は余り見当らぬ。」

「日支両国は唇齒相倚の間柄で、勿論親善でなければならぬ。日支の親善を図るには、先づ日本人がよく支那人を了解せなければならぬ。支那人をよく了解する為には、表裏二面より彼等を観察する必要がある。経伝詩文によつて、支那人の長所美点を会得するのも勿論必要であるが、同時にその反対の方面、即ちその暗黒の方面をも一応心得置くべきことと思ふ。食人肉風習の存在は、支那人にとつて余り名誉のことでない。されど厳然たる事實は、到底之を掩蔽することを許さぬ。支那人の一面に、かかる風習の存在せし、若くば存在することを承知し置くのも、亦支那人を了解するに無用であるまいと思ふ。」

中国人における「食人」風習については、桑原以前にも、神田孝平などが考察をおこなっていた。この中国に存在するとされた「食人」の風習を、深刻にうけとめたのが、魯迅であった。魯迅の問題意識は、日本に留学していた際に、こうした日本の言説にふれ、形成された可能性がある。魯迅は、胡適が提唱した新文学の嚆矢というべき『狂人日記』で、「吃人」の問題をあつかった。以後、「吃人」は、中

国が克服すべき旧弊の根源にあるものとして、中国「人文学」における一大テーマとなってゆく。

本シンポジウムの趣旨では、「国民国家を基盤にした人文学からグローバル化時代が要請する新たな人文学へと知的範型の転換を東アジア規模で図ろうとする意図」が表明されている。この「食人」問題についても、国民性の違いに帰着させ、国民国家意識の強化へと作用したことは明らかであろう。今日でも往々にして、桑原のような「科学的」立場からの主張を目にすることがある。これをどう、東アジア規模で転換を図るかについては、今後本研究会で議論してゆくかと思うが、特殊な問題に関する個別的研究であっても、普遍的な視野を保ちつづけることが何より重要であると考ええる。